

素人だってもう、科学を専門家まかせにできない

いつのまにか私は世界が科学のなかにあると信じるようになってしまっていた。全ては予測可能であり、全ての事態に対処可能なのだと。ところが現実にはコトが起こってみると、専門家たちが発するのは「想定外」という言葉ばかりだ。人は考えられるところまでしか考えられないという単純な事実を私は忘れていた。「安全だ」という専門家たちの言葉を鵜呑みにしていた私のような素人にも責任がないとはいえない。世界は科学よりもはるかに大きくて、科学者だって考えられるところまでしか考えられないことを忘れていたのだから。

人間は自然を自由に扱えるほど賢くはない。もちろんその自然のなかには原子力も含まれる。誠実な科学者とは、世界の前で科学がいかに卑小で無力なものを自覚しつつ、それでも前に進もうとする者のことだろう。誠実さのかけらでもあれば「想定外」という言葉は使えないはずだ。

3・11以降、「科学者」の言葉は（いままでに増して）信じられなくなった。しかし、だからといって科学のことを一から勉強するには、もう歳を取りすぎた。ならば信頼できそうな科学者が書いた本を読むしかない。では、信頼できそうな科学者が書いた本をどうやって探せばいいのか。書店の理工書売場の棚の前で呆然とする。

そんなとき見つけたのが、『サイエンス・ブックレビュー』である。副題は「科学技術は倫理を語りうるか」。著者の猪野修治は湘南科学史懇話会というサークルの主宰者。苦学して物理学を学び、高校教師をしながら、科学史・物理学史を研究、専門家/素人の枠を超えたこのサークルをつくるにいたった。本書は、これまで猪野が専門誌や一般誌に書いてきた科学書の書評集である。

猪野は書評する本を徹底して読み込む。読み込んだうえで、それでも自分には十分理解できなかったところもあると認め、自分に語るうることだけを語る。その誠実さはまさに科学者のものだ。当然ながら3・11以前に編まれた本だが（3月14日発行）、原子力について書かれた文章も少なくない。『息子はなぜ白血病で死んだのか』や『核と人間』、『物理学史と原子爆弾』といった本について書かれた文章は、まるで3・11を予期していたかのようだ。あるいは、猪野が紹介する佐々木力や山本義隆の本を読めば、科学についての考え方、世界との向き合い方について、なんらかのヒントが得られるにちがいないと思えてくる。これこそが書評の仕事だろう。

こうなってしまったからには、もう専門家にだけコトをまかせるわけにはいかない。地震のことも、大津波のことも、原発事故のことも、どんなことでもありうるのだと考えて世界に向き合っていかなければならない。生き残ったものがそう考え直すのでなければ、亡くなった方々も浮かばれないではないか。もう素人は科学について他人まかせにはしてはられない。（「Meets Regional」6月号、no.276 2011.6）